逃げてきた男

奈良原　青春

幼稚園時代

記憶に残る私の人生史で初めて「逃げた」という感覚を感じたのは幼稚園の頃だったと思う。

父親は教育熱心で、私を県下屈指の進学校の付属幼稚園を受験させた。

その面接の真っ最中、私は泣き出して、その場から逃げ出して外へ出て行ってしまったのだ。

しかし、結果は合格。

思えば、これが私の逃亡人生の始まり、原点だったのだ。

なぜ、私は面接の場から逃げ出したのか？

答えは簡単。嫌だったからだ。

この答えが私の人生を読み解く上で重要な鍵になると思う。

小学校時代

小学校に上がるとき、父は国立の付属小学校を受験させたが、あっさり不合格。そのまま、近所の公立小学校に進んだ。

低学年では、ごくごく普通の少年だったと思う。

とくに「逃げた」という感覚を持った出来事も起こらなかった。

高学年になると、人間関係で悩まされることが多くなった。クラスに乱暴な子がいて、できるだけその子のそばには近

づかないようにしようといった知恵がついたのもこの頃だ。

当時、私は野球をやったりサッカーをしたりという仲のよい友達と一緒に遊んでいたが、一方でませた子のグループ

からも目をつけられていて、そちらのグループに一時引っ張られたことがあった。

そのとき、私が自覚したのは私には主体性がないということだった。

中学時代

中学にあがるとき、部活動を何にするか友達同士で話題になったことがあった。

私は野球やサッカーが好きだったので、普通に考えれば野球部かサッカー部ということになるのだが、仲の良かった

友達がバスケ部に入るというので、何も考えず自分もバスケ部に入ることにした。別にバスケがやりたかったわけで

はなかった。

相変わらず父は教育熱心で、分厚い受験関係本を買ってきて私に読むように命じた。

そこには高校受験への心構えやどこの高校からどこの大学に何人入っているかというようなデータが載っていた。

私がつくづく主体性がないと自覚するのは、そんな面白くもない本を父に言われるまま黙々と読んだことだった。

父はさらに布石を打ち、近所の大学生を私の家庭教師につけた。私は黙って父のすることに従っていた。

中学時代

何も考えずに入部したバスケ部だったが、１学期の半ばには出たり、出なかったりの幽霊部員になっていた。

夏休み前までに部活のほうは、出なくなり辞めてしまった。

なぜ辞めたのか？答えは簡単だった。嫌だったから。

ここで、またしても私は幼稚園の面接のときと同じ「逃げた」感覚を持った。みんながやっているのに私は逃げてしまっ

た。おそらく、小さな挫折感が芽生えたのも、この退部がきっかけだったと思う。

帰宅部が家に帰ったってやることはない。テレビを見ている時間が長くなっただけだ。

中学時代

中学時代、特にこれだけはやったと言えるものはなかった。

勉強だけは熱心にやったと思う。典型的ながり勉タイプ、かつ印象の薄い男、それが私だった。

中２のとき、卓球部のやつがコーチがサウスポーを求めている、というのでやらないかと誘いがあったが、入部するこ

とはなかった。対人関係が全然だめという今の姿は、この時分にベースが作られたものと思う。

本来、中学生なんてやりたいことがいっぱいあって困るはずだろう。そして勉強なんて嫌い、というのが普通、というか

健全な姿だと思う。

しかし、私は違っていた。何もやることがなく、勉強に逃げ込んだ。勉強は自己完結する。一人でやっているだけなの

で誰に対してもかかわりがない。勉強していれば誉めれこそすれ、怒られることはない。これほど楽なものはなかっ

た。しかし私は勉強よりももっと大事なもの、人間関係というものを避けてしまったのである。

高校時代

受験勉強は良くやったと思う。

帰宅部なんだから、当然といえば当然だろう。

部活もやらない、勉強もさっぱりでは、立つ瀬がないではないか。

ということで、消去法で残った勉強だけは熱心にやった。というかその世界に逃げ込んだというのが正しい言い方かも

知れない。

高校受験も伝統校と言われる県立、難関と言われる私立も受かり、当然のごとく県立に進んだ。

高校に入学すれば、普通の生徒は部活をどうするかを考えるだろう。

けれど私は違った。部活に入ることなど考えてもみなかった。

ああ、人生の中で最も楽しかるべき青春時代に私はなんてことをしてしまったのだ。部活をやらないからといって別に

勉強が好きなわけではないのだ。

そんなわけで、同じ帰宅部仲間とそそくさと帰り、部活をやっている連中よりだいぶ早く帰宅する。

４時半には家にいたのではないだろうか？

そんな早く帰ってきて、高校生の私は何をしていたのだろう？

テレビの青春ドラマを見ていたり、ラジオで音楽を聴いていたような気がする。

同じ時間に同級生は苦しい部活の練習に耐え、がんばっているのだ。私は彼らを非常に羨ましく感じ、家でくすぶっ

ている自分は一体何なんだろうという後ろめたさを感じることもあった。

さて、帰宅部仲間の１人が２学期に入ると、応援指導部に入ると言い出した。せっかくの青春時代、何かにかけてみ

たいという動機だった。私も入らないかと誘われたが、入部することはなかった。

やりもしない勉強というしろものに囚われ、がんじがらめにされている感じだった。なんとなく疎外感を感じるように

なったのもこの頃である。

高校時代

中３のときの同級生でミッション系の高校に通っている好きだった女の子に思いきって今の心境を手紙に書いておくっ

たことがあった。勉強、勉強の毎日の閉塞感を訴える私に彼女は勉強ノイローゼになったかと心配の返事をくれた。

勉強はほどほどにして、文化祭や体育祭を楽しんだらどうかというアドバイスをもらった。

それは確かに日常生活があまりにも勉強に傾いていてバランスの悪い私には最適のアドバイスであった。

　つまり、人間関係がうまくつくれず、つまらない学校生活を送っている自分を再認識したに過ぎなかった。

部活をやってない子はやはり部活をやっていない子と接近し、会話を持つ。会話の内容はおおかた参考書選びの話

だったり、勉強中心だった。実につまらない高校生活だった。自分の息子が現在高２だがテニス部も練習や試合と文

化祭実行委員の集まりで高校生は時間がないと家でもらす。高校生はそれでいいんだと思う。やりたいことを先送り

にせず、やれるのは高校生活だけだろう。

高校時代

では高校時代、一体私は何をやっていたのだろう。

平日は勉強勉強でストレスがたまり、週末は中学時代仲が良かった同級生２人とつるんで、公園に行ったり、ゲーム

をしたりして過ごしていた。同じ高校に親しくしていた友達はいなかった。みんな勉強のライバル、と言う感じだった。

高２になると、そんな無味乾燥な高校にいくのがおっくうになることがよくあった。とくに日曜日、中学の友達と遊んだ

翌日である。そんな気分のとき、私はときどき学校をずる休みして、学校へ行ふりをして家を出て、そのまま町外れに

広い河川敷の公園で寝そべってぼんやりしていた。クラスのみんなから離されるという焦りを感じながら。

しかし、公園で寝そべっている時間帯は大きな開放感だった。

そんなことを年間で１０日以上繰り返した。もっともこれ以上休んでは出席日数があぶないと分かって計画的にさぼっ

ていたから、確信犯ではあったが。

このころから私は、少しずつ人間関係をさけるような癖が付いていったのだと思う。

高校時代

おそらく、高校時代から私はすでに病気になりかけていたのだ。対人恐怖、視線恐怖、引きこもり、そんな人間に向

かって突き進んでいたのだ。これを食い止める方法はなかったのだろうか？と３０年以上もたった今、考えてみる。

おそらく、なかったのだろう。我が家の価値観が勉強ができることが全てだったのだ。できないやつは駄目なやつ、お

ちこぼれ。そんなステレオタイプの価値観でしか人間を見ることのできない環境で育ったのだ。自分も当然人をそうや

って見てしまう。結果、人とうまく交わることができなくなっていたのだ。

普通ならぐれるだろう。しかし、わたしはぐれなかった。代わりに心に大きな矛盾をかかえながら、ほとんど存在感の

薄い男として生きていたのだ。印象の薄いやつ、いるんだかいないんだか分からないやつ、まさに当時の私がそれだ

ったのだ。

高校時代

そんな私も高３になり、受験生となった。

高校時代を色に例えると灰色と答えるだろう。

当時の社会的な背景もあったろう。

一流大学に入れば、いい会社に入れて一生人生安泰できるというステレオタイプの価値観が多くの国民の心を支配

していた。

折りしも高度経済成長時代、誰も何も考えずに突っ走ればそれでよかったのかもしれない。

しかし、私の精神状態はほぼ限界に近づきつつあった。高校３年間を勉強につぶし、さらに受験勉強をやらねばなら

ぬ。受験日が近づくにつれて、深夜、住宅街を徘徊する私の姿があった。おそらく、ストレスがマックスにかかった状

態だったろう。将来のことなど何も考えていなかった。、ただいい大学に早く受かって楽になりたかった。全てを終わり

にしたかった。私の頭にはそのこと以外何も考えていなかった。

そんな努力の甲斐もあったのだろう。受験した４つの大学（早稲田、上智、中央）のうち、早稲田の２学部（法、商）に

何とか受かった。合格発表日のことは今でも鮮明に覚えている。うれしかった。そして、終わったと思った。

これで楽になれる。

合格手続きの日、ひと悶着あった。手続きを終えた新入生を待ち構えているかのように、赤旗新聞の女性が勧誘して

いるのである。なんのことか良く分からず気軽に署名してしまった私は、帰宅してそのことを母に母に話した。

とたんに母の顔色が変わった。「そんなことをしたら就職できなくなるわよ。今から私が行って取り消してきてあげる」

母はすっ飛んで家を出て行き、赤旗新聞の購入を取り消してきた。私はその様をぽかんと見ているだけだった。

ただ、大学というところは油断のならない怖いところだと思ったのもそのときである。

赤旗新聞を購入して、私が共産党員にでもなれば就職できなくなることを母は心配したのであろう。

しかし、私にはそんなことはどうでもよく、ただただ疲れていた。

大学時代

高校の卒業式を終え、大学の入学式までの間、２週間ほどあったと思う。

私はただただ疲れていた。

そんな時、父は職場の上司で、私が入学する大学の先輩である裁判官に会わせるから、昼食時に有楽町に来いと

命じた。私が法学部を受けたのは、法律が好きだからでもなんでもない。将来のことを考えるより、私は今までの勉強

中心の生活から自分を解放し、十分精神も体も休める必要があったのだ。

受験勉強に全エネルギーを注いで、もう私には余力が残っていなかった。

それなのに父ときたら、常に先回りして私の外堀を埋めてしまう。

裁判官との食事中に交わした会話で唯一覚えていることは「大学というところは自分からアクションを起こさないと何

も得られないところだよ。」という言葉だった。そして私に判事ホームズ物語という書籍をプレゼントしてくれた。

がしかし、私はそれ以来、この本を開いたことが一度もない。そんなことより、どこか誰も居ない空気のきれいなところ

へ行ってゆっくり休みたかった。

大学時代

入学式には、同じ高校のクラスメートと学生服に角帽を被って出かけた。

そのクラスメートは中学時代はサッカー部、高校時代は山岳部に所属しており、文字通り文武両道だったが、私は見

栄を張って中学時代、サッカーをやっていたとその友達に嘘をついてしまった。

その友達が、山のサークルに入ると言うので、またしても主体性のない私は、その友達の入るサークルに入部してし

まったのである。

一方、語学のクラスでは、新人歓迎コンパが大学近くの居酒屋で行われ、参加した。

また、入学した大学のOBである裁判官、検事、弁護士の講演会にも高校のクラスメートらと参加したりと、入学したて

の頃はまずは順調な滑り出しであったと思う。

大学時代

様子がおかしくなってきたのは、友達に誘われるまま入った山のサークルの新歓合宿のときである。

たしか、山梨県の山に１泊２日でいったときだったと記憶している。

山頂に着き、その夜はテントを張って、野営した。大人数の山行だったからテントもたくさん張られていたと思う。

その中の１つのテントに当然私も居た。３年生、２年生の先輩と私を含めて３人の新入生の計６人位で泊まったと思う
。

先輩たちの会話は私にとってとても大人びて見えた。お気に入りのウイスキーを持参して、呑んでいる先輩も居た。

先輩たちの新入生に対する印象がその場で語られたと思う。

私に対する印象は「お前、知的にみえるなあ」とか「むっつりスケベ」とかいうものだったと思う。

別にどうということはなかった。

しかし、翌日、下山し、駅へ向かうバスを待っているとき、私は皆から離れ、一人タクシーを拾い、駅に向かい東京へ

帰ってしまったのである。これは異常な行動といわなければなるまい。なぜこんなことをしてしてしまったのか？

バスを待っている間、上級生も下級生も皆楽しげに会話していた。しかし、わたしはその会話の中に入っていけず、一

人、ポツンと取り残されたような心境に陥った。そして、その場にいるのがいたたまれなくなり、逃げ出してしまったの

である。

大学時代

ここがまさに私の人生の岐路だったと思う。

歴史にIFが許されるとするならば、私は３０年前の下山時のバス乗り場に戻って、その場に我慢して残ってみんなと

下山したかった。たとえ、どんなに孤立感にさい悩まされようと、存在感の薄い男として無視され続けようと、その

場にしがみついていたかった。いやいるべきだったのだ。そうしていれば、その後の大学生活や職業生活が違ったも

のになってきていたとはっきり理解できるのである。。ここが私の人生のまさに岐路だった。

しかし、現実は違った、私は人間関係から逃げてしまったのである。そして東京に戻って翌日から大学にもいかなくな

ってしまったのである。

大学時代

サークルから離脱し、学校に行かなくなったことで語学クラスの人ともつながりが切れた。

高校のクラスメートで同じ大学に入学した連中と野球観戦に行ったりしてかろうじてつながっている感じだった。

ほとんど学校へ行かなくなった私はどこへ向かったのか？

それは受験生時代、足繁く通った県立図書館だった。ここで１日ぼんやり過ごす日が増えた。

それは間違いなく、目標を失って、燃え尽きてしまった男の姿だった。

ある日、図書館で中学時代のクラスメートだったH君と出会った。F君は浪人中で図書館に通っているとのことだった。

私は法学部に進んだことを話し、見栄を張って検事を目指していると言った。

大学に通っていないのに何と言ううそつきな男なのだろう。

自称優等生できた私にとって学校に行かないという事実は、大きなショックを私に与えた。挫折感といってもいい。

親もそんな私を心配してか病院の神経科に連れて行った。そこでつけられた病名は「仮面性うつ症」というものだっ

た。

大学時代

人生初にして最大の挫折といってよかった。

３０年たった今考えれば、なんて小さなことで悩み、貴重な大学時代をムダに過ぎしたのかと思うのだが、あとの祭

り。若く経験も浅い当時の私には問題を解決するすべを知らなかったのだと思う。

授業に出なくなることが続くと、自分の心にだんだん負荷がかかってくる。しかし、どうにもならない。

今で言う精神的な引きこもり状態に陥ってしまったとしかいいようがない。

このようにして私は１学期をほぼ棒にふった。

誰か信頼できる友人や先輩がいたら、よかったのにと思う。

しかし、私にはそういった人がいなかった。

２学期こそ新規一転、再起して取り戻そう。そう思い、２学期の初めに語学のクラスに出てみた。知った顔はいたが、

皆不思議そうな顔をしている。

皆の好奇の視線が私に突き刺さった。それでもがまんして語学クラスに出続ければよかった。しかし、私はここでまた

しても逃げたのだ。せっかくの復帰のチャンスを逃してしまったのである。

そして２学期も出たり出なかったりの学校生活が続いた。

期末試験だけは受けようとしたのだが、学校でクラスメートだった人と顔を合わせるのが嫌で、ほとんどの科目を

受けなかったのだ。２年からがんばって挽回しても１年間でとれる授業のコマには限りがあるので、１年生の終了時

点で私は早々と留年が決定してしまったのである。このような状況に陥っても、私は親にも学校にも相談できず

悶々とした日々を過ごしていた。

私は、大学をドロップアウトしたに等しかった。

大学時代

１年の出席不足で早々と留年が決まってしまった私。

２年に入るとき、考えたのはとにかく上限いっぱい授業をとって５年で卒業しようということだった。

それと１年遅れではあるがサークルには入ろうと考え、ヨットサークルの新人歓迎サークルに参加した。

逗子の海岸で初めてヨットに乗り、船酔いしながらも新人合宿を終えた。

このままヨットサークルを続けていれば１年遅れではあるが、それなりに充実した大学生活が送れたであろう。

しかし、次の合宿をキャンセルし、私はヨットサークルへ行かなくなったのである。

最初は意気込んで始めるのだが、全て３日坊主で終わってしまう。ヨットサークルの仲間は皆いい人ばかりで人間関係

で問題はなかったはずだ。

大学時代

ここにいたって私は大学内で完全に孤立していた。精神的にはドロップアウトした状態といってもいいだろう。

一流大学に入れ、入れと言われ続け、将来のことなどこれぽっちも考えずに、ただ偏差値の高いと言う理由だけで選

んだ大学。一流大学に入ることだけが人生の目的となり、その先のことなど全く考えてこなかった私。

馬車馬のように勉強し、入った大学はどうだったのか。

世間的な評価は高い大学だろうが、私には人が多すぎて、都会の雑踏のような所で、アカデミックなところを想像して

いた私は正直、幻滅した。他のものを犠牲にしてまで貴重な青春時代を勉強にささげ、ようやく入った先に待っていた

のがこれだったとは。私の身の丈に合わない大学だったのだと思う。

大学時代

私は大学で何をやりたかったのだろうか？

おそらく、私のゴールは大学合格であって、そこから先が描けなかったことが、このような糸の切れた凧のような大学

生活を送らざるを得なくなった最大の理由であろう。

バランス感覚が極端に悪いのも私の特徴だ。勉強以外のことを器用に続けることができない人間なのだ。

サークル活動だって、大部分の学生は普通に続けているはずだ。なぜ、私は続けられないのだろうか。

ここに私という人間の根本的な欠陥が横たわっている。

その欠陥は努力によって修復できないのだろうか。

あるいは生まれついた遺伝子で修復不可能なものなのだろうか。

それともメンタル面で病気を発病してしまったのだろうか？

私は、外部的な肩書きは一流大学の学生だが、内面はまったく空の人間だった。

大学時代

２年生になって、あと４年大学生をやることになった私。語学は全て落としてしまったので未済クラスというのでやっつけた。とにかく１年を棒に振ったので授業だけはでるようにした。出席日数不足で不可なんて悔やんでも悔やみきれない。相変わらず、大学内では孤立していて、語学未済クラスの中に何人か知った顔を作ったが単発に終わった。
たまたま未済クラスの中で、付属上がりの人と知り合い、野球サークルに誘われた。同じ頃、高校３年の夏に一緒に長野県の学生村で勉強した友達が１浪後、教育学部に入学していて、ある日キャンパス内でばったり会った。
そいつもなにか体を使うサークルを探していて、渡りに船と、そいつと一緒に付属上がりの人の属すr野球サークルの練習試合に一度参加した。１２月頃納会にも参加して、いい感じだったし。
３年に上がる前に春合宿にも誘われたが
「国家公務員試験を受けるので」かっこつけて辞めてしまった。
ああ、私は大学に入ってから、何とサークルを３つも辞めてしまっているのだ。
だから大学内での思い出というのがあまりないのだ。山のサークルを続けていればもっと濃密な学生生活を送れていたかもしれない。ヨットをやめなければ新しい生活が開けたかもしれない。野球サークルだって同じだ。
しかし、私は長続きしなかった。そうした人間関係から逃げてしまったのである。

大学時代

もう少しやり方があったろう。

１年を棒にふったのなら２年から再スタートを切ればよい。その祭、学内のカウンセリングなどを利用して一番良い方

法を相談するという選択肢だってあったはずだ。

しかし、大学はマンモス大学で、良きにつけても悪しきにつけても、自由放任で、ほったらかしだった。

私は大学に入る直前、父の職場の上司である裁判官と食事をともにしたとき、その方が言われた言葉を思い出して

いた。「大学ってところは自分から行動を起こさない限り何も残らないところだよ」

その言葉の意味を噛みしめていた。中学、高校時代、人間関係を避けて帰宅部で通した私は、人生を生きる態度が

全て受動的だった。それは長い間授業を受けて勉強をするというスタイルを続けてきた当然の帰結と言えた。

何もしなくても済んでしまう、それが私の通っている大学だった。確かに入学時の学力は全国トップクラスであったろ

う。しかし、落ちようと思えばどこまでも落ちていける場所だった。

マンモス授業と少人数のゼミをこなすだけでは時間が余ってしまう。それにプラスして、というか、むしろこちらの方が

重要だと思うのだが、その２つを凌駕するような何かに打ち込むことがこの大学で要求されることだったのだ、と３０年

たった今思う。私の義父は大学の体育会ラグビー部出身である。私はこの人を尊敬している。４年間をラグビーという

厳しい部活動にかけたのである。

大学時代

他人から見ればつまらないものだって構わない。

自分にとって、自分が大切だと思うものに賭けてみる。

そういう気概をもってこそ初めて大学生活は輝いてくると思うのだ。

人生にとって高校、大学時代をどう過ごすかは極めて大事なことだ。

その過ごし方で人生が決まってしまうと言い切ってもいい。

その意味で私は自分が送った高校、大学時代を後悔している。

やりたいことを後回しにした高校時代を悔いている。

多くのものを犠牲にして、せっかく入った大学なのに、何もなかった。

世間では一流と言われている大学なのに、皮肉なことに私の心は全く満たされておらず、魂の抜けたような大学生活

を送ってしまった。このことを私は悔いている。

大学時代

大学時代をふりかえってみて、かろうじて印象に残っているのは２年の夏休みに行った箱根のリゾートホテルでのア

ルバイトと３年の夏休みに行った伊豆白浜のリゾートホテルのアルバイトだった。

学内では孤立していると自覚していた私はどんな形でもいいから人間関係をつくりたかったのだと思う。

それをアルバイトに求めたのだと思う。

結局、私に残ったのは、この２つのシーズンバイトの記憶だけだった。

５年生になって初めてゼミに入り学生らしいことをやったが、周りの人達との力の差は隠しようもなかった。

提出論文も友人に書いてもらったものを写す有様だった。

いったい私は大学生活で何をやりたかったのだろうか？

何のために高校時代、あんなに勉強したのだろうか？

答えは出なかった。大きな挫折感と空虚感だけが残って大学生活を終えることになる。

社会人時代

得るものが何もなかった大学時代だったが、就職活動は一応やった。それも大手企業ばかり。空っぽの大学生活を

送ってきた私が、大学名を武器に大手企業を訪問する姿は滑稽とも言えた。自分がどれほどの人間かもきちんと理

解しておらず、何もやりたいことのない人間を企業が採用するはずもない。そもそも何でそんな有名企業に入りたいの

か？世間体か？いやそれしかないと言えた。だってその会社でやりたいことがなにもないのだから。抜け殻のような

私にとって、就職活動は５年間のだらけきった学生生活の最後の形ばかりの儀式と言えた。友達もだれも居ない学

生生活を送ってきた私はこれからどこへ向かって漂っていこうとするのか？私自身ですら答えが見つからなかった。

そんな私でも大手の住宅メーカーが内定を出してくれた。大学の名前と言うのはたいしたものだ。

別に住宅ニ興味があったわけではない。このかったるい就職活動というセレモニーを少しでも早く終わりにしたかった

だけである。